熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	日置流の弓歌に就きて ： 文苑
Author(s)	雷鳥山人
Citation	龍南會雑誌，６３： ５０-５３
Issue date	1898-02-17
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5057
Right	

Kumamoto University

聖言幽谷遷。丹青招畫手。賦頌倩詩仙。長栖萬年樹。鼓吹太平天。

瓶中梅松吟　松隱居士

數朶早梅一朶松。松梅春色入瓶濃。松間梅立清於鶴。梅外松横勢似龍。松樹元來君子樹。梅花亦是絶塵容。梅松雅會我獨伴。松下聯梅酒萬鍾。

用韋蘇州韻寄菅白雲

劣隔一重雲。無由逢幽客。獨往臨長流。清嘯倚松石。歸來對雙親。情話委月夕。巾車如無意。林下尋履迹。

日置流の弓歌とて三十一首その節の人の秘持たるを見たれば茲に錄して弓稽古の業とす歌のうちにいかゞとうち傾かるゝふしゝ

には處々愚見を附せつ　雷鳥山人

人毎に生れつきぬる弓形を見形一樣にれもふもそうき

おもふものかはといふべきにや

弓はたゝ習のまゝに教へなは醫書斗よむ藥なりけり

藥はくすしとあるべきなりその心にてもあるべし

長矢束腕の太きが射手ならはならひは更にいらぬものなり

陰陽の和合と弓はいるなれは推手つよなる射手そ射手なる

奈何にせむ推手ばぬるくなまなへて控手かちなる射手そ悲しき

皆人の力矢束のをとることと控手のさかるゆゑと去るへし
弓にかねあつる心はありながら人によりぬる和歌のうらなみ
　和歌はかゝる所なしいそとでもいへば今少しまさりなん
肩骨の出つる射手こそ矢強(ヤツヨ)けれ控手さかりにいるかたはなし
弦拍子弓のひやうしといふことを去りてものぶる矢のふしぎさよ
傳へなよ合點いかぬ射手ならは大事はさらに大事ならぬに
　ならぬにはならねはとあるべきにや
稽古には直す所は多くとも只一色といひて射させよ
弓はたゝ拍子(ヒヨウシ)を專(セン)と射ぬ人は長刀をすく兵法(ヒヨウハツ)の人
矢のこゝろ弓のはり顏知らすして唯いる人は名をは取るまし
空穗なる矢の根は錆ひて弦はとけ弓射る斗いるは射るかは
當流の弓の雜談あるならはこゝろにとめてきゝとめよかし
人の弟子かまへて弓をそしるなよその人ことにこゝろあるへし
中すみの弓の足踏忘るなよ習ひうけても何にかはせむ
　忘るなよは忘れなはといふべきにや
皆人のその師を學ふものなれは弓か弓がまへ大事なるへし
　上の句皆人は下の句なりけりとあるべきにや
我弓の搆へをだにもならすして許し印下を望むをかしさ

ならすはなさずといふべきにや

稽古には百矢いんより四つ五つならひを專といるそまされる

誰も實はやりし時はすくものを通して射ぬる人は稀なり

誰もみなはやる時こそ弓はすけ通していぬる人ぞまれなるといふべきにや

矢をかけて引えはるゝはおほゆるそはなつときには無念むさうに

おぼゆるぞはれはかるぞの誤なるべし

別(ワキ)のものたゝ一かたに見定めて放つ矢先にあたらぬはなし

色々のもみち重ををりかけて えめてゆるすな引くな放つな

弦道といふと えらぬ射手はたゝ櫓かひも えらて船にのるかな

下の句櫓かいしらずの船のりとしれといふべきにや

陰陽の和合と えらているは只片れもひする戀にそありける

弓ゆかみ我身もゆかみ地かたむき弦矢心をすくにもつへし

こゝろをばこゝろはとあるべきにや

轄とは數のケ條を えかけつゝ手もちのうらに締かけて射よ

締かけていよはしめているなりといふべきにや

淸琢りふたつの射分なけれともはなれて跡のたるまぬかよし

琢は濁の誤か又はなれてはなしてといふべきか

梓弓勇むる袖のけしきかなまた踏むあしは神がきのうち

勇ひる云云はいざむ袖こそをしけれその云云などいひてはありなり

千早ふる神の惠のあるゆゑに仰くに高き名こそきこゆる

千早ふる神のめぐみのありてこそ仰ぐも高き名はきこえけれといふべきにや

批評

前號和歌短評

蘆洲月下漁郎

枯木蕭條寒風に嘯き、天地落寞萬物も蟄するの候、我か龍南歌壇は、燦爛たる花咲き亂れて、時ならぬ美觀を呈しぬ。硯友會兼題を始めとし、卽題、雜歌合せて七十有四首、亦盛なりとはいふべし。如此き繁昌は未だ曾て見ざる所、今や文蕊欄隆盛の極ともいふべきか、然れども數量の多少は、以て眞に文學の盛衰を卜するに足るや、いでや漁郎をして少き く駄評を加へしめよ。

時雨するの歌、雁の羽風を時雨ときくは、漁郎の未だ曾て聞かざる所、基紀君の新想乎、めづらし。弓はりのゝ歌、月影くらき雲間といひては、月前の題意にそはず、物思ふの歌、難なし。雲はれての歌面白し、しばしくまとるの一句趣あり。山人君の歌、情味津々、萬感胸に逼りて、思を月に寄するの夕、雁聲を聞く、誰かあはれの感懷なからんや。まとあけての歌、竿のかりかねとは受けがたし。芝峰君の詩名は夙に之を聞く、和歌も達者に詠まるゝとは、亦やさしき人かな、たかためにの歌、奇想とはいふべからざれども、月の桂の花の都にとは、めでたき詞遣ひといふべし。

こゝろしての歌、格調くだけたり。霜かれのゝ歌、れく霜をの歌、共に難なし。清泉君のれく霜にの歌、